

Living the Lotus 3

Buddhism in Everyday Life

2024

VOL. 222



立正佼成会 インド コルカタ支部
ガヤ法座 パटना法座

Living the Lotus Vol. 222 (March 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鑽会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。



「慎み」は「慈しみ」から

庭野日鑑
立正佼成会会長



「慎む」とは思いやること

「我^{わが}宿^{やど}の草木^{くも}にかくる蜘蛛^{はら}の糸^{いと}払^{はら}わんとしてかつは（すぐに）やめける」という歌があります。良寛^{りょうかん}禅師^{ぜんじ}のやさしさがあふれた、あたたかな一首です。ふと払おうとした蜘蛛の糸、そこに精いっぱい生きる小さな命をみとめ、思わず手をとめた良寛さんのほほえみまでが目に浮かぶようです。

なんの気負いもないちょっとした所作^{しよさ}のなかに、人としての慎み^{つつし}深さと、あらゆるものを包みこむ慈悲^{じひしん}心を感じます。

慎み深くあることについて、釈尊^{しゃくそん}は「身と言葉を慎み」や「身体、言葉、心を慎むのは善い行為である」など、先月号の「恥^はじること」と同様に、その大切さをしばしば述べておられます。私たちはこの言葉を、ともすると一般的な生活規範^{きはん}のように受けとめがちですが、良寛さんの歌を見てもわかるように、慎みとは、慈悲と一体のものではないかと私は思うのです。仏教学者であり、曹洞宗^{そうとうしゅう}の僧侶でもあった奈良康明師^{なら やすあき}によると、釈尊の教えは「すべて『慈悲』というものに根拠^{こんきよ}をもって説かれている」といいますから、「慎む」ということも、思いやりの心を深めるものであればこそ、仏の教えとして説かれているのです。

では、私たちに良寛さんと同じことができるかといわれると、至らぬ自分にそこまでは……と、つい弱気になりそうです。それでも、せめて気がつくかぎり、慎みと思いやりをもった言動を心がけたいものです。

なぜなら、奈良師の言葉をお借りすれば、「慈悲とは慈悲の実践つまり訓練によって増大し、熟^{ぞうだい}していく」ものだからです。悟ったから慈悲心が起こり、慎み深い行ないができるのではなくて、他を思いやって言動を慎み接するなかで

「みんな一つに結ばれている自他一体の命なのだ」と気づくことが大切で、そこに一つの悟りがあるのです。

身近な実践から世界の問題まで

ところで、開祖さまは、本会の根本道場である大聖堂建立の年、いまから六十年前の三月四日に、「教団は大伽藍ができると既成化する」と述べています。建物が大きいからりっぱな教団なのではなくて、また伽藍ができたからそれで教団が成熟したということでもなく、そこに集う同信の仲間一人ひとりが、仏の教えを学んでいつもいきいきとして、謙虚で慎み深く、それがひいては地域、社会の人びとの心にぬくもりや元気を与える——そのような教団でありつづけることが大事だと伝えたかったのでしょう。

その意味でいえば、本会の「一食を捧げる運動」が長くつづけられているのはとても重要なことです。もともとは松緑神道大和山教団のみなさんが実践されていたものですが、月に数度、各自の食事を抜いたそのぶんを献金させていただくという、まさに慈悲の心を実践に移し、それがまた社会貢献にも結実する身近なこの活動を、これからも大切につづけてまいりたいと願っています。

また、世界宗教者平和会議など、宗教や宗派の枠を超えた仲間が、世界的な課題の解決をめざして対話を重ねることは、参集するそれぞれが謙虚に、自利心と慎みをもって臨まなければできないことです。開祖さまがその土台を築いてくださったのは私たちの一つの誇りと受けとめていますが、そうした活動が形骸化しないためにも、私たちはつねに慎みを忘れず、慈悲という釈尊の教えの根本に立脚してものごとを考え、行動することが大事なのだと思えます。

釈尊には、「あらゆることに慎み、恥じる人は自己を護る」というお言葉もあります。この「自己」を「宇宙全体と一体の自分」と受けとめると、身と言葉を慎むことの意味の大きさがより胸に迫り、世界のあらゆる場所で、一人ひとりが身と言葉を慎むことを念じずにいられません。

(『佼成』2024年3月号)



火宅を脱して今、安らかな仏の世界に

オクラホマ教会
ロジャー・ウィリアムズ

私の名前はロジャー・ウィリアムズです。私は2010年に立正佼成会オクラホマ教会に入会しました。立正佼成会の信仰をとおして仏教や法華経と出遇ったことは、私の人生を変えてくれた最も重要な出来事でした。そして、オクラホマ教会のサンガの優しさと温かさ、開祖さまの教えと法華経を身近なものにしてくれた教育プログラムのお陰で、これまで自分の人生に生じたすべての出来事は、私を仏さまの世界へと導いてくれるはからいだったのだと受けとめることができました。今日、このような説法の機会を与えてくださったことに感謝の気持ちから私自身の体験をお話しさせていただき、教えをより深く理解する機縁にさせていただきたいと思えます。

私は、アメリカ中南部に位置するオクラホマ州のごく普通の家庭に2人姉弟の長男として生を受けました。姉とは6歳違いです。父はテキサス州の出身で、母はウィスコンシン州の出身です。父は第二次世界大戦の退役軍人で、戦後は占領軍の一員として日本に駐留していました。その後、父は教師となり、町の小さな大学の副学長兼経営責任者として働き、母は献身的な主婦でした。両親はとても優しくて思慮深く、寛大な心の持ち主で、私はリベラル派プロテスタントの信仰の家庭の中で育ちました。

私自身、キリスト教の信仰によって何か悪い経験をしたわけではありませんが、当時の私にとってキリスト教はそれほど魅力的なものではありませんでした。そして本来ならば両親の愛情あふれる家庭環境の中で問題なく成長するはずだったのですが、私の病気のせいでそれを十分に生かすことができなかつたのです。私は今でいう「全般性不安障害」や「衝動制御障害」だったと思えます。しかし当時はそのような診断は

一般的ではなかつたので、周囲からは「自分勝手」「問題児」といったレッテルを貼られました。ですから両親は幼少期から私の行動を気にかけて、厳しくしつけたのです。それが私の身の安全と健康を守るためとは知らずに、私は次第に両親を疎ましく思い、時には怒りや憎しみを覚えるほどでした。

幼少期の私を端的に言い表すとすれば、非常に衝動性が強い子どもだったと言えます。気になることがあると食事中でも席を立ち、着替えをしていたかと思えば途中で遊び始めてしまう。また外を歩いているだけでも気になるもののほうへ走って行ってしまふなど、両親にすれば毎日が緊張の連続で、おそらく気が休まることはなかつたと思えます。今でも強烈な記憶として残っているのは、自宅から通りを2ブロックほど歩いたところに高齢者や障害者のケアホームになっていた古い家があり、まだ幼かった私がその家の玄関ポーチで入所者たちと話をしていると、心配した母が血相を変えて「ロジャー！」と叫びながら迎えに来たことです。

こうした傾向は小学校に入学しても続き、ど



オクラホマ教会で説法をするロジャーさん



うしても自分の衝動を抑えることができない私は、先生や友だちと衝突することがしばしばありました。当時、学校ではさまざまな罰が与えられていましたが、私は徐々に罰を受け入れれば何をしてもいいという開き直る態度をとるようになりました。私の問題行動は成長するにつれてエスカレートし、いつしか盗みや破壊行為にも及びましたが、まだ深刻な犯罪に手を染めることはありませんでした。両親は私の問題行動を薬物療法が必要な精神疾患ではなく、大人に成長すればやがて治るものと考えてくれたことに感謝しています。

しかし私は、高校時代からシンナーを吸い始め、その後アルコールやドラッグに溺れていきました。私が青年期を送った1960年代後半から1970年代前半は、ベトナム戦争の反対運動やアフリカ系アメリカ人による公民権運動、ドラッグ・カルチャーなどが活発化した激動の時代で、私はその影響を強く受けたのだと思います。父はその何年も前から、「ロジャー、今のお前は自分で自分を苦しめているんだよ」と言っていました。私も当時そう感じていました。その後、わが家の引っ越しを機に、新しい環境で自分を立て直し、行動を慎もうと決心しましたが、アルコールやドラッグが容易に入手できることで、ますます深みにはまり、ついには18歳で刑務所に入り、20歳の時には精神科病院に収容されたこともありました。

また大学時代、私は「自分探し」を目標に冒険の旅に出ました。ヒッチハイクで全米を回ったのですが、潜在的な危険や両親を心配させることに無頓着だった私は、両親の警告を無視して一人で旅に出たのです。旅は1週間から1カ月以上続き、多くの出会いや非日常的な体験が楽しく、いろいろなことを学びました。でも、結果的にそれは自分の問題からの逃避行に過ぎませんでした。その後、両親の愛情あふれるサポートのお陰で、私は心理学の学士号を取得して大学を卒業することができ、1977年にはオクラホマ州福祉局で働き始めたのです。

そんな恵まれた環境で生活していたにもかかわらず、私は誘惑に負けてしまい、1981年に

再びドラッグとアルコールに溺れる毎日が始まりました。私は欠勤を繰り返し、とうとう勤務中にアルコールやドラッグに手を出すようになり、もはや飲酒を自分でコントロールできない状態になってしまったのです。やがて、うつ状態となり、仕事を失う不安と死の恐怖に苛まれていきました。そんな危機的状況の時、アルコール依存症から回復した高校時代の友人が、依存症の自助グループへの参加を強く勧めてくれたのです。私が28歳の時でした。

自助グループとは同じような悩みを抱えている人たちが互いに支え合い、励まし合ってその困難さを乗り越えることを目的とした集まりです。《アルコールをやめたい》《二度とアルコールを口にはしない》という思いはあったとしても、依存症の人は飲酒欲求に負けて飲酒を正当化してしまいがちです。少しだけならいいだろうという甘い考えが頭をもたげ、気づくと以前と同じような飲み方に戻ってしまうのです。

アルコール依存症は否認の病と言われ、自分が病気であることを認めないことが大きな問題です。私自身も当初は《自分はアルコール依存症ではないんだ》と病気であることを否定し、依存症の回復プログラムの有効性を信じていることができませんでした。でも一方で多くの友人たちがアルコールやドラッグに溺れて亡くなっていく事実にもものすごい恐怖を感じていたのです。

その後、私は自助グループに参加することで断酒に成功している人たちが大勢いることを目の当たりにしました。集会では自分の体験談を語ったり、人の体験談を聞いたりしました。そうした同じ悩みを抱える仲間との交流が精神的な支えとなり、断酒を成功させる大きな力になるのです。自助グループの集会で参加者の体験談を聞いているうちに私は、《この話は他人事ではない。私のことなんだ》と自分自身の内面と向き合い、依存症を真正面から受け入れられるようになっていきました。

そんな頃、私はある女性に出会いました。彼女はカリフォルニアを出発してニューヨーク、そしてヨーロッパへ向かう途中、オクラホマを

旅していたのです。当時、依存症の回復プログラムの最中だった私は、彼女に自分の病気の深刻さを正直に伝えることができませんでした。アルコール依存症という病気は、ある種の自己欺瞞と自己否定を伴っており、私自身が依存症に対して無自覚だったこともあって、彼女が抱えていた精神的な問題を認識することができなかつたのです。彼女もまた自分自身の精神的な問題を認めようとしなかつたため、私の問題を十分に認識できずにいました。

そのようにお互いを理解し合えないまま、彼女の妊娠をきっかけとして私たちは結婚しました。その後、私は依存症の回復プログラムに積極的に取り組み、1982年によく断酒に成功し、幸運にも、振戦せん妄や発作などの離脱症状（禁断症状）を免れることもできました。

アルコール依存症からの回復にはどこまでも誠実に自分の欠点を徹底的に認め、自分の行ないの償いをする必要があります。しかし、欠点を認めて償おうとする私に対し、妻は自分自身の問題に向き合えないまま、執拗に私を攻撃し、人生の失敗の原因をすべて私のせいにしようとしました。後に妻の家族から、彼女が子どもの頃から情緒障害で苦しんでいたことを知りました。その後、個別にセラピーを受けたり、夫婦でカウンセリングに通ったりして互いの溝を埋める努力を続けたのですが、結果的に一緒に暮らすことが不可能になり、私たちは1992年に離婚することになりました。

離婚時に夫婦の両者が親権を主張すると激しい親権争いに発展しかねないため、私たちは子どもたちの幸せを最優先にして、親権について何度も話し合いを重ねました。その結果、離婚後も私たちが協力して子どもたちの養育に携わっていくことが可能な共同親権に合意することができたのです。その間、家族全員にとってつらい時期もありましたが、何よりも子どもたちが健康で幸せに成長してくれたことに感謝しています。現在、長男はロサンゼルスに住み、地元オクラホマに住む長女は2人の子どもに恵まれました。うれしいことに一番上の孫娘は今年、大学に入学し、オクラホマ教会の活動メン

バーとなりました。

私は青年期に宗教に対してあまり魅力を感じませんでした。が、依存症の回復プログラムを体験したことで宗教的な実践が重要な意義と役割を持つと考えるようになり、道教や仏教などの宗教に関する書物を読み始めました。最も関心を覚えたのは仏教で、私は仏教についてもっと学べる場所やグループを探し始めたのです。なぜなら依存症からは回復したものの、依然として私の心に満たされないものがあつたからです。ある時、ベトナムや中国の仏教寺院を訪ねましたが、英語が堪能な修行者やリーダーがいないことが大きな障壁でした。

2010年のある日、私は友人に誘われ、立正佼成会オクラホマ教会で行なわれている根本仏教のクラスに参加しました。「日常生活のための仏教」という考え方に魅力を感じ、四諦・八正道・六波羅蜜などの根本仏教を学んだ時、《こんなに素晴らしいものの見方や考え方があるのか》と長年探し求めていたものを見つけた喜びと感激で胸がいっぱいになりました。それと同時に仏教が日常生活に応用できる実践的な問題解決のツールであることに気づきました。

英語で研修を受けられるだけでなく、毎回温かく迎えてくれる教会のサンガとともに、仏教を日常生活に生かした非常にわかりやすい「習学」のプログラムに私は徐々に引き込まれていきました。やがて木曜日の夜の瞑想グループにも定期的に参加するようになり、経典読誦、座禅、歩行瞑想を初めて経験し、その後サンデーサービス（日曜礼拝）や法座修行にも参加するようになりました。

特に法座修行は、お互いの悩みを語り合い、共有するという点で、私が1年間通っていたアルコール依存症の自助グループの集会とよく似ていたため、とても有益な修行であると認識しました。ただ大きく違っていたのは、法座リーダーが参加者の悩みや苦しみに対して、《この教えによって幸せになってもらいたい》と仏教の真理に基づいたアドバイスをしながら慈悲の心で仏さまの世界へ導こうとしていたことでした。



今思うと、立正佼成会に入会して私の人生は大きく変わりました。そして最も大きな気づきとなったのは、2017年7月に東京の立正佼成会本部で行なわれた国際伝道部のリーダー教育に参加したことでした。教育の中では『法華三部経』の集中講義が行なわれ、私は譬諭品の「三車火宅の譬え」の解説を聞きながら、自分の心を見つめ、これまでの人生を振り返ることができたのです。

青年期にアルコールとドラッグに溺れ、煩惱のままに生きていた私は、「三車火宅の譬え」に当てはめれば、遊びに夢中になり家が火事（火宅）であることに気づかない子どもたちと同じでした。そして、父親（仏さま）が三車という方便（真実に導くための手段）を用いて子どもたちを救い出すわけですが、考えてみれば私が依存症から立ち直ろうと自助グループに入ったことは、法華経と出会うために仏さまが与えてくださった方便だったのです。

アルコール依存症から回復したあとも私は毎週、自助グループの会合に出席して、自分の体験を語りながら、かつての自分と同じ依存症に悩み苦しむ人たちのサポートを続けています。仏教に縁のなかった人には「すべての人の心の奥には、良い人間になりたいという願いがあるんです」と伝え、仏教に興味と理解を示してくれた人には「私と一緒に教会に行きませんか」と声をかけています。以前の自分のつらい体験を、同じ依存症で苦しむ人たちのために生かすことができ、仏さまの教えを伝えることで自助グループのメンバーが立ち直っていく姿を見ることが喜びになったのです。

「三車火宅の譬え」は、どのような境遇にある人でも、目の前に現れてくる悩み苦しみを仏さまの教えに沿って一つ一つ乗り越えていけば、やがて必ず悟りを得ることができることを教えてくださっています。私は立正佼成会に入会し、教えを学び実践したことによって火宅から脱し、心安らかな仏さまの世界という大白牛車をいただいたような気持ちです。

私の現在の日課は、毎朝自宅のご宝前で経典を読誦し、その後20分間の瞑想をし、さまざま

な仏教に関する書物を読むことです。特に先祖供養は、立正佼成会に入会する前の私の先祖観とはまったく異なり、私の精神的成長に大きな役割を果たしています。毎日、仏さまに感謝するとともに、先祖や恩師、友人たちに読経の功德を捧げています。この先祖供養によって青年期に無謀にもドラッグやアルコールを乱用し、ないがしろにしてきた尊い命への感謝の念が深まっていると感じています。教会の活動には毎週4～6回、直接またはZoomで参加しています。オクラホマ教会のサンガ、そしてインターネットでつながることのできる北米国際伝道センターと国際伝道部のより大きなサンガに深く感謝しています。

私は今、アルコール依存症から回復して、体と心の健康を取り戻した喜びを感じながら、少しでも人さまのお役に立てるような人間になれたことを本当に有り難く思っています。何より私を立正佼成会オクラホマ教会に導いてくださった仏さまの大いなる慈悲とはからいに感謝いたします。人生のすべての出来事に仏さまの深いメッセージが込められていることに、私は気づかせていただくことができました。今後も日々仏さまの教えを学び、一つ一つの出会いを大切にしながら、さらに菩薩行の実践に励んでいくことをお誓いいたします。



導師のお役を務めるロジャーさん

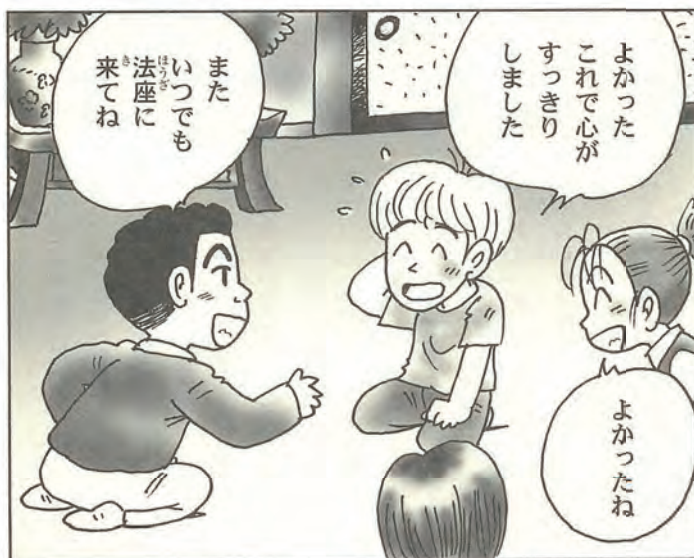
まんが立正佼成会入門

会員になったら

教えを生活に生かす

人里はなれた場所でお坊さんになって修行するのではなく、みんなと同じ生活を送りながら、家庭や学校、職場、地域社会などで仏さまの教えを生かし、りっぱな人になる行ないを続けていく人たちの集まりを在家仏教教団といいます。立正佼成会は、その在家仏教教団です。

教えを実践するといっても、一人ではくじけてしまうことがあります。そこで、手本になる先輩や仲間を求め、いつも正しい教えを聞き、はげまし合っていくことが大切なのです。



豆知識

立正佼成会では「下がる修行」を大切にしている。それは下がる（謙虚になる）ことで自分の中にある仏さまの心を発揮することができるからだ。人格完成のために大事な修行だ。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

仲間といっしょに (サンガ)

仏さまの教えは自分の生活に生かし、人さまに勧めてこそ尊いのですが、一人だけだとくじけてしまって、なかなか実践できません。そこで、仏さまは教えを学び合う人の集まりを「三つの宝」の一つにくわえました。それをサンガ（僧）といいます。

仲間といっしょだとなまけそうになる心がおさえられ、わからないことがあっても教えてもらえます。また、互いに磨き合い、ともに成長できます。

よい友達、仲間をもつことは、とても大事なことです。



● 豆知識

「サンガ」とは古代インドの言葉で「集合、集団」という意味で、仏教では「修行者の集まり」のこと。インド仏教では、サンガの構成員は出家修行者だけを指していたが、今日の日本仏教では在家仏教徒をも含む。



人に説いて自分が悟る

人のために説きしがゆえに

立正佼成会開祖 庭野日敬



先に「解説が大切である理由は二つある」とお話ししましたが、その第二は、人のために説くことで自分も「法」の真実に徹し、ほんとうの悟りに達しえる、ということです。

これはお釈迦さまが、「我先仏の所に於て此の経を受持し読誦し、人の為に説きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり」（常不軽菩薩品）と、言明なさっています。

「阿耨多羅三藐三菩提」というのは、「仏の悟り」のことです。ですから、「この教えを人のために説いたので、仏の悟りを得ることができた」と、おっしゃっているのです。人のために説くことが、いかに大事であるかということです。

人さまを法華経の教えに導こうとすると、よほどの人でないかぎり、自分がまだまだ「法」の真実に達していないことがまざまざと感じられます。そこで、解説書を読み直したり、先輩に相談したり、自分で思いをめぐらせてみたりします。そうすることによって、知らずしらずのうちに自分が高まっていくのです。

私の恩師の新井助信先生は、書がたいへんお上手でした。どんな稽古をなさったのかを尋ねてみたところ、「習字塾を開いて、子どもたちを教えているうちに上達してきた」ということでした。小唄や三味線のような芸ごとにしても、人に教えるようになってから、芸に磨きがかかるのだそうです。お導きも、それと同じです。

理論だけを頭に入れようとするのではなく、実地に当たっているいろいろな人に接してみ、試行錯誤を繰り返してみてこそ、いわゆる「方便力」が身につき、菩薩としての実力が高まっていくのです。

相手によっては、そっぽを向く人もいるでしょう。反発する人もいるでしょう。そういう人に「何とかして教えをわかってもらおう」という、その努力と工夫が自分を高め、深めるのです。もちろん、素直に聞いてくださり、みごとに救われる人もいます。そういうお導きを達成したときの喜びというものは、何ものにも代えがたいものがあります。

つまりは、実践することです。体験することです。体験をとおして人間性が高まり、体験を重ねてこそ人間としての厚みも加わるのです。

禅の言葉に「一寸座れば一寸の仏」というものがあります。線香が一寸燃える時間だけの坐禅をしても、そのぶんだけは仏の心でいられる、ということです。

私はそれを「一人を導けば、一人ぶんだけの仏」と言い換えたいのです。「仏」というのは「目ざめた人」なので、一人を導いてみれば、それだけの「目ざめ」が生じるからです。このことは、私の長年の体験から、太鼓判を押して保証します。

いずれにしろ、法華経は現実に人を救い、世を救うための教えです。ですから、一人でも多くの人にそれをお伝えして、救われていただかなければ、この教えをお説きになったお釈迦さまのお心にお報いできないのです。どうか、このことをしっかりと胸に刻んでますます精進されますことを、心からお願いいたします。

結願文に書かれた救いの原点

国際伝道部長
赤川 恵一

みなさん、こんにちは。今月も「部長コラム」をお読みいただき、ありがとうございます。3月の会長法話のタイトルは、『『慎み』は、『慈しみ』から』です。ご法話を拝読して、先ず心に浮かんだのは、「身口意の三業」という言葉です。

大聖堂にご安置されている久遠実成のご本仏さまの胎内には、開祖さまによって書写された法華三部経とともに、開祖さまがご本尊造立について決意を表わされた結願文が納められています。1960年10月、法華三部経の写経が完成した折にしたためられたこの結願文に、次の一節があります。『三乗ノ三業受持ノ修行コソ涅槃ノ妙境ニ至ルノ大直道タリ』。「四諦」「十二因縁」「六波羅蜜」という三乗の修行を通して、身・口・意の三業を整え、ふれ合うご縁を嬉しく希望に満ちたものへと高めていくことの大切さを教えてくださっている一節です。

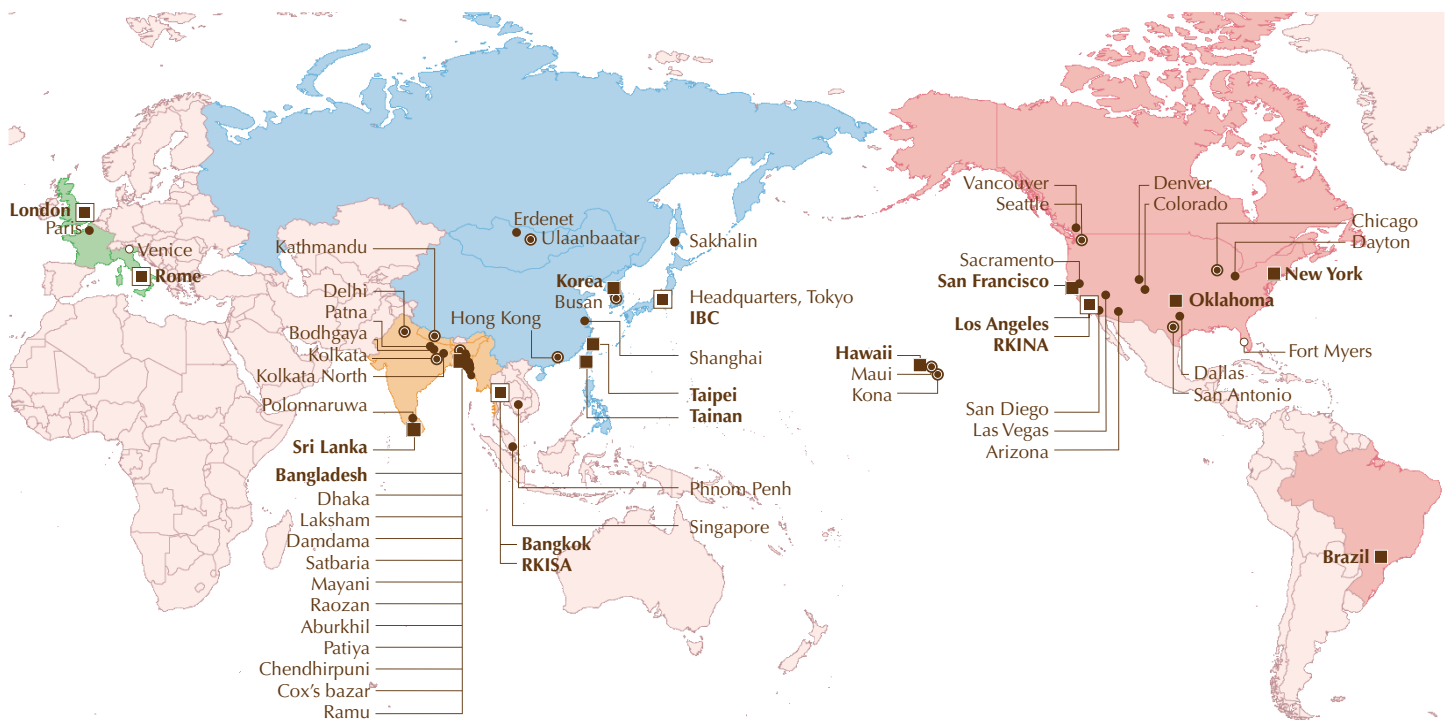
本会会員が目指す「人格完成」は、日々の生活の中で、周囲への思いやりをもって慎み深く生きることから始まります。本年は、大聖堂建立60周年の記念すべき年です。今こそ「慈しみ」の実践を通して、開祖さまの想いが込められた結願文を、心して味わってみようではありませんか。



2023年10月29日、教師授与式に参加した海外拠点の会員と共に
(大聖堂正面玄関前、最前列左から2番目が赤川部長)



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about
local Dharma centers

facebook

twitter

